

- 日 時 平成25年10月17日（木）10：00～10：17
- 場 所 中央合同庁舎4号館 共用第2特別会議室
- 出席者 久間議員、原山議員、青木議員、内山田議員、中鉢議員、橋本議員、平野議員、大西議員
松元事務次官、阪本内閣府審議官、倉持統括官、森本審議官、山岸審議官

○議事概要

議題1. 第10回国際科学技術大臣会合について

- 原山議員 議題1の第10回国際科学技術大臣会合について、事務局から説明して頂きます。

<内閣府 匂坂参事官から説明>

- 原山議員 一つ、補足情報ですが、STSフォーラムのバック・トゥ・バックでかなりのイベントがありまして、総合科学技術会議と関連するところとしましては、STSフォーラムの前日にEU-Japan Science Policy Forumというものが開催されました。それから、終了した後ですが、イギリスの首席科学顧問を代表とした有識者と総合科学技術会議の有識者とのミーティングというものが持たれました。これを機会に、バイラテラル・マルチラテラルの会合が複数行われたというのが現状です。そういう意味で、科学技術ディプロマシーの実践という形ですので、これに対して御説明させて頂いたという次第です。何かコメント、御意見がございましたら、どうぞ。

- 青木議員 資料2ページの(3)を見ると、スピーカーがフランスの方とメキシコの方とシンガポールの方で、ヨーロッパとアメリカとアジアとなっているのかと思いますが、2つ質問があります。1つは、フランスはフランス語が云々ということを行っていますけれども、スペイン語を話す人は結構世の中に多いと思いますが、スペイン語圏というのは何かそれでまとまるようになっているのかということです。

もう一つは、アジアでは結構日本も中心になったフォーラムのようなものをつくる動きがありますけれども、アフリカでも何かそういうものはあるのでしょうか。アフリカというのは、旧植民地の母国との連携というのがとても強いと思います。これに対して何かアフリカ全体でまとまりというのはありますか、サイエンスのネットワークみたいなものは。

- 匂坂参事官 多分答えになっていないかもしれませんが、スペイン語に関しましては、この会議で提示するディスカッションペーパーを作成するにあたって、OECDが調べた色々な報告書等を読んだのですが、基本的に先進国の中でも、欧米に研究者のモビリティ、フローが集中しているということがあって、それはただ英語圏だけではなくて、特にスペインは南米諸国を中心として人材のフローが結構集中しているというデータがありましたので、一方で英語は大事にしなければならないというものはあるのですけれども、やろうと思えばスペイン語だけで生きていくというのも出来ないこともないのではないのかという状況かと思えます。アフリカについてですが、サイエンスのネットワークということが言えるかどうか分かりませんが、アフリカ連合という組織がございまして、それ全体で色々な取り組みをやっている中で、科学技術も一つの重要な分野と位置づけて取り組みを行っているかと承知しています。

- 原山議員 私の知る範囲での補足情報ですが、ラテンアメリカは、一つの組織体として色々な経済活動もしている訳で、その中に科学技術イノベーションも入ってきますが、基本的には英語をベースにしてやりとりを国際会議の場ではやっていらっしゃるので、スペイン語に閉じた形とかというのはなかなか、内部ではやっていますけれども、対外的にはスペイン語を活かしてというのはあまり見られていない。英語がドミナントになっているのが現状で、アフリカに関しては、今色々な連合がありますが、一つは、南アフリカが非常にリーダーシップをとって、科学技術イノベーション施策に関しては、コアとなるというか、ハブとなるといった認識でもって、近辺の諸国に対する影響を強めるという動きがあります。

- 大西議員 2つお尋ねします。このSTSフォーラムでは内山田議員も非常にいいレクチャーをされて大変好評だったと思いますが、この中身を伺って、1つは、今回出席した27の国の中には、主要なところで、例えばアメリカと中国と韓国が入っていない。アメリカは取り込み中であつたのですが、中国・韓国が交流もこういう分野で深いと思うので、どういう経緯だったのかです。特に韓国は、確か去年、こちらから向こうに訪問するのが流れています。だから、今年はどうするのかということもあると思いますが、そのことが1つです。

それから、確か文部科学大臣もSTSフォーラムの時にこうした会をやられたのではないかと思います。日本は大臣が2人、科学技術担当と教育とに分かれていますのですけれども、各国の名前を見ると、高等教育と科学技術を兼ねているような大臣もいらっしゃるので、そういう方は両方に出ているという感じですが、各国の状況は、分かれているところが多

いのか、一人で両方を兼ねている方が多いのか、その辺が分かったら教えてください。

○匂坂参事官 1つ目の御質問についてでございますが、この大臣会合は、基本的にSTSフォーラムに出席しておられる方々にこの大臣会合にも出席して頂けないかということで御招待状を出しているものでございます。結果的にアメリカ・中国・韓国はSTSフォーラムにも出席出来なかったということで、こちらにも出来なかったということなのですが、アメリカに関しましては、当初はホルドレン大統領補佐官が出るということで連絡があったのですが、やはりなかなか厳しい状況ということで、代わりにアンダーセクレタリーの方が出るということもあったのですが、そちらも厳しいということで、シャットダウンの影響等で来れないということになりました。

中国・韓国につきましては、ここ数年、来ていないという状況でございますが、そこは少し色々な経緯があるのかと思います。あまり臆測で物を言うのもいけません、色々、例えば中国であればサマーダボスをやっていたりとか、そういうこととの関連もあるのではないかと思います。

あと、2つ目の、文部科学大臣が会議を開催していたかどうかについてですが、少なくともSTSフォーラムの一つのプログラムとして開催していたのはこの会議だけでございます。私どもが承知している限り、文部科学大臣が公式な形で会議をやったとは聞いていません。バイ会談は色々やっていると聞いていますので、そのバイ会談のことかと思いますが、私が把握している限りで言いますと、各国の方々、要は山本科学技術政策担当大臣と下村文部科学大臣の両方の職責を担っている方が多いのではないかと、ほぼそういう状況ではないかと思います。

○原山議員 これも補足ですが、国によって教育と科学技術を分けているところもあれば、分けてあったのをマージするという国もありますので、結構動きがあるという分野であります。それは、政策的に教育からイノベーションまで一気通貫という必然性から、省庁の再編成というところもあったと聞いています。他に御意見が無ければ、本日の有識者議員懇談会は終了させていただきます。